

典型に對し、大正維新の所謂改造期に當り心得ふべき事は、彼の過激、無政府、共產主義の如きは、世の不逞不平不滿の洛伍者の説に外ならずして、如何に巧妙なる理窟を附會するも、到底正しき國家社會に許容すべきに非ず、幾千萬世を経るとも斯かる主義主張は正法の國に實行さるべきに非ず。こは亂世の餘波たる強盜山賊の類にして、唯百鬼夜行の醜態慘狀を演じ、人類をして不幸に陥らしむに過ぎざるのみ。されば世界文化の偉業に貢獻すべく、我れの進んで爲すべきは、猛火の勢を以て風靡せんとする過激なる傳染病の退治にあり。こは正しく是好良藥の法華經の色讀日蓮が「根本の信」を以て、不惜生命の決定心に住し「二陣三陣」の旗頭の下に、末法萬年廣宣流布の實現を期すべきは正に此の時にあり、皇國の爲め大君の爲め義勇以て公に奉すべき亦此の時なり。日本國民として久遠の生命ある國家に生れたるを喜ぶと共に、現代思想界の煽動的動遙に對し、我等が意志を教示し給ふ「日蓮先駆けしたり和殿原二陣三陣

續け」との、御聖訓に添へ奉るの覺悟を以て、日蓮が一門は精神的生誕の赤誠を披瀝して、聖誕七百年の千載一遇の好機をとらへ紀念するはさることながら、本朝唯一無二の偉大なる人格と、崇高なる國家觀念の教訓に見て、社稷報恩に奉答するは、蓋し亦國家使徒の本然なり。然かも大正十年は、精神冥々の裡に相通する日本佛教の開祖、法華經宣傳の大恩人、國家主義の鼓吹者たりし、聖德太子の一千三百年と、傳教大師千百年の忌辰なるのみならず、更に教主釋尊の御降誕二千九百五十年の嘉辰に迎遇する、我等が紀念を新にすべき多幸の年なるに於てをや。(大正十年正月十五日稿)

奉迎七百年聖誕

結 城 瑞 光

戦後の世界は政治教育或は藝術宗教の各方面に混沌たる思潮充滿して人心の動搖、世界の趨勢は小天地に跼蹐して人類の安寧を防ぐ、吾人等は如是邪想に對して飽く迄制肘し實際的、價値的方面

より社會救済に正適せる根本思想を欲求して止まざる也。

明治初代に於ける時勢の推移は宇内の大勢を洞察せる憂國の志士によりて數百年來の專横なる武家政治を倒壊し、因循腐臭を一新して外來の文明を摸倣するに急なりしなり、舊來の學問信仰は容赦なく驅逐され、物質文明の潮流は剛直篤實なる人心に侵透して、輕佻浮薄なる虚飾的風潮一世を蓋ひ、佛敎も排佛毀釋の非運に遭遇し輕便主義の宗敎は茲に勢力を得るに至れり、雖然盤根錯節に依りて利器の別を知るの古語あり、佛陀は三千年の往昔に於て己に此の時代を達見して白法隱没の時とは云えり、孟子も憂患に生じて安樂に死すと道破せられたり、却て人間は刺戟に依りて自覺する者多く縱令苦境に没落すとも自己を反省し向上の力を有すれば失望すべきに非ず、滔々たる物質文明の不健全なる生活を持續して自己の天職を自覺せず、徒に外部よりの壓迫に恐怖しては前途甚だ寒心に堪へざるなり、現今社會の表面上は物質

文明に於て正整せし如き觀ありとするも内面的生活は却て後退し人心の不安は漸々加はり慰安を求むる救の聲は人心の奥底より叫ばれつゝある也、此の時健全なる信仰を鼓吹する先覺者ありとせんか、吾人の凝視果して何處ぞや、諸君よ聽け自ら何れの宗の元祖にも非ず又未葉にも非ずと公平なる立脚を闡明し混濁なる世界人類を救済せんとして現れし眞の聖者日蓮上人を紹介せんとす。

前には茫々果てし無き大洋の紺碧を控え、後には滴ん幽邃の青緑を負ひ、仰げば千古變らぬ悠々の蒼穹此處日本國の東南隅房州小港の地は聖日蓮を生める淨地なり、時は之れ人皇八十五代後堀川帝貞應元年壬午二月十六日、曉天十丈の朱輪は常闇の夜を破つて大洋を離れ黄金の箭は虚空に射られる頃なりしなり、慈父は藤原鎌足公の末孫貫名重忠悲母は大野吉清の女梅菊御前にして幼名を善日麿と命名せり、天稟の英戈は双葉より香しく十二歳にして當國の名刹清澄寺に登りて得度す、鷲

馬を繋ぐ羈絆は永く天馬の足を繋ぐ能はず、非凡なる天資を有する聖人は當時の佛教の分裂して各々自己の宗派に偏執し其の覇を稱えて終ひに歸趨する所を知らざるを遺憾とし佛教を統一的に見る時は條然として一貫せる根本的佛意の存するを推考し之を研めんとして即ち佛天に日本第一の智者となし給へと祈誓を凝らし拾七歳決然鄉關を辭して鎌倉或は叡山南都に遊學し止暇斷眠奮闘の十六年間の星霜は研究時代にして、其の學問の該博は獨り佛教に止まらず、汎く和漢の學に亘れり、勿論一宗一派に固著し自己の勢力を扶殖せんなどの非英雄的行爲は毫も無かりき、惟だ眞理を求めん爲に嚴正なる態度を以て公平に研究の歩を進められたる也、建長五年四月廿八日修業せる聖人は故郷清澄の一角に佇立して、金色の光渺茫たる蒼海に映せんとす瞬間、紺青の天空に轟く一呼百諾の題目は旭日に對つて高唱せられたるなり、春風秋雨三十年嚴訓慈愛の發動は剛となり柔となり生涯を一貫して佛識立證に即して迫害襲來の必然的運命

を甘受せるなり、洗華經の眞生命を開拓して佛教の正邪を開闡し眞理の所在を明白にし教理上の大義を提唱して國家諫曉人心の趣歸を圖りし、其處に聖日蓮の自覺的改革の躍々たる人格を透見し得べし、所謂威嚇も權勢も日蓮聖人の正義の主張と偽らざる告白の慈悲の血涙に墊塞しぬ、日蓮を誤解せる人士は「狂熱は金石をも熔かさずば措かざる也、彼を信する者は己先づ其の狂熱の中に溶けて自己の理解の餘地を失ひ身延入山は彼の一大懺悔なり」と云ふ考察を爲す者あり、且つては柳營鎌倉の街頭に侃々諤々の辨を揮つて一世を警覺せる當年の法華經の行者が、隱遁的生活を九ヶ年間繼續せし事は頗る矛盾の感ありとするも延山以前の活動は多く對外的にして之れ創業時代の特色也寧ろ當然の理と云ふべく、入山以後は内部の訓練の力を致し一は嚴肅なる滅罪生活と美しき報恩生活にして、一は將來に於ける群生救済の重大責務を任すべき子弟の教養の爲め頽齡の身を顧みず晩年の意氣を傾倒せられたる也、如是聖人

の艱苦にも屈せざる救世的觀念の大勇猛心は死すとも猶止まざる衝天の意氣ありと雖ども、一面に於ては一輪の野菊に對して無常を歎げく纖細ズイテトの情調あり、剛毅の反面は極めて謙讓なる人格者にして深く自ら責め自ら抑えて許す所無かりし偉大なる聖人なりき、聖人を知らざる淺薄なる人士は得て皮相的見解を下すもの也、

弘安五年十月十三日臨滅度時の鐘の音は韻々として寂莫に響き香煙薰郁たる辰の刻に慈顏笑を含みて法体眠るが如く不滅の靈光衆生の闇を照し、深き涅槃の雲に隠れ給へり、寶算六十一歳、血と涙とによりて色彩られし生涯は清く而して深刻なる感銘を残せる歴史の一頁なりき、大正の現今天下の民衆は何れも肉餓へ心渴きて靈の麵包と滾々として洩かざる生命の泉を冀望して止まざる也、宗教の改革生活の根本的改造は既に吾人の頭上に接近せり……聖誕茲に七百年大蒙古の襲來無しと雖も思想の變遷惡流の來寇或は排日など現代の疾患は吾人等を痛戟して、見ぬ蒙古以上の慘劇を見

る噫！是等の疾患を克服し永へに人類の光明たるべき當年の法華經の行者今何處に居る、日蓮聖人を研究し理解する人物は已に聖人を知る者にして現代を超越せる法華經の行者也と謂ふべきなり。

自覺せよ青年僧侶

戸田 峰 仙

本年は聖誕七百歳にて吾が門下は津々浦々に至る迄至誠を以つて奉祝す。吾人は日蓮大聖人を口にする時常に自覺の二字を思ひ浮べざるを得ないのである。

「人生字を知るは由來憂患の初め」と云ふは、何を語れるか、所謂自覺の意味に外ならぬと思ふ。世に處して空々寂々たる者は、無事太平あらんも稍々理解力成すれば則ち種々の憂生じ來る。詰り道を學び自覺力の生ずるに従つて色々な煩悶の起るものである。例へば一般に田舎の人は質朴にして別に野心も希望も無き様に見ゆれ共晨に星を戴き、夕に月を踏みて、終日糞土の間に勞役し、而